

お姉ちゃんたちと同じように、縄跳びがやりたい
赤崎保育園（鳥取県東伯郡）

1歳児



「お姉ちゃんたちと同じように、縄跳びがやりたいの？」
聞いているのは、お姉さん(5歳児)です。

1歳児の弟は、年齢の少し上のお姉さんのやっていることは自分でもできていると思っています。

目の前に自分が挑戦したい課題がモデルとして存在しています。

お姉ちゃんたちは、あなたは小さいから無理。やめなさいとは言いません。



僕は、自分が見たことをイメージし、身体も同じように動かしていると思っています。

そのイメージと現実のギャップを不思議さにとらえ、どのようにすればイメージどおりにできるのかを探ります。



食い入るように見つめているこの視線の先ではおねえちゃんの友達が縄跳びをしています。

うまく飛べない原因をもう一度じっくり観察することによって突き止めようとしています。



もう一度イメージを固め、実践します。

何度も繰り返して、イメージと身体の動かし方のギャップを埋めようと努力します。



ローマは一日にしてならずの言葉どおり、1歳児の僕にはそんなに簡単にできるはずはなく、結局お姉さんたちに手伝ってもらい、少しだけ満足しました。

<考察>

興味・関心をもとに挑戦し、できないことをきっかけとして、「なぜできないのか」、「どうすればできるのか」など方法を探る姿は、何歳であろうとも変わらない、まさに科学している探求者の姿です。

「人間は、できるからやるのではなく、できないからやろうとする。」と説いたレフ・ヴィゴツキーの言葉のとおり、科学する心は、遊びの中の学びとして存在しています。

みどころ

歩けるようになり、体が思うように動き、好きな所にいけるという1歳児なりの「自分でできる」という自信や、「お姉さんのように縄でぴょんぴょん飛びたい」という意欲的な思いが表れています。モデルになる姿があるので、自分も縄を跳ぶというイメージをもって動き出しています。自分でやってみて、思ったようにできていないことが分かります。

こうしてまねたり繰り返したりすることで、今までにも様々なことに挑戦したり楽しんだりしていたからこそ、誰に言われるでもなく、自分から動いたり観察したりすることを繰り返し、難しいことに挑戦しているのです。

見て、感じて、イメージして、やってみる。その自分の動きを感じて、また、更にじっくりと見て、感じて、やってみる。この繰り返しの中で、体の動きや縄の動き、縄の特徴なども感じ取り、技術の獲得とともに知識や知恵も獲得しています。